

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：53901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02625

研究課題名(和文) 句動詞の起源・成立過程に関する通時的研究

研究課題名(英文) The Diachronic Study of the Origin and the Development of Phrasal Verbs

研究代表者

神谷 昌明 (KAMIYA, Masaaki)

豊田工業高等専門学校・一般学科・教授

研究者番号：40194980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：句動詞とは、動詞+副詞、動詞(+副詞)+前置詞の結び付きで多様な意味を表す口語的表現である。「動詞+副詞」から成る句動詞の起源・発達には2つの過程が考えられる。(1)古英語接頭辞付動詞からの発達、即ち中英語以降、動詞の前に位置していた分離接頭辞又は副詞が動詞の後に移動し句動詞の原型が出来上がったこと。(2)フランス語源の多音節の1語動詞を翻訳する過程を経て句動詞が量産化されたこと。OED, YCOE等のコーパスを利用して、古英語接頭辞付動詞が現代英語にどの程度残っているのか明らかにした。そして古英語接頭辞付動詞と現代英語に残る接頭辞付動詞の対応関係、さらに句動詞との対応関係も明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Phrasal verbs are combinations of verb + adverb, verb (+ adverb) + preposition. The origin and development of phrasal verbs (verb + adverbial particle) are related to two processes: (i) the development of prefixed verbs in Old English into phrasal verbs in Middle English; the adverbial particle or separable prefix is moved after its verb, so a new phrasal verb is formed. (ii) the development of French verbs into basic English verbs + adverbial particles. We extract all the prefixed verbs with up- and out-, using the YCOE Corpus and to make a database of the prefixed verbs with up- and out- for the research on the origin and development of phrasal verbs. The number of the prefixed verbs with up- and out- is 20 and 36 in YCOE respectively. Next we discuss how the prefixed verbs in Old English are developed into phrasal verbs in Middle English and make a correspondence table of prefixed verbs in Old English and their existing prefixed verbs in Present-day English and their phrasal verbs.

研究分野：英語学

キーワード：句動詞 接頭辞付動詞 古英語 中英語 PPCME 2 YCOE

1. 研究開始当初の背景

句動詞(Phrasal verb)の代表的な先行研究には Bolinger(1971)、Makkai(1972)、Quirk, R., et.al.(1985)、嶋田(1985『句動詞』)などがある。そして Oxford, Collins, Cambridge 等から句動詞(活用)辞典も数多く出版されている。しかしながら国内外を問わず、その多くは共時的なレベルでの研究であり、歴史的に句動詞を分類した先行研究や成立過程のメカニズムに焦点を合わせた研究は、Hiltunen(1983)以降はあまり活発に行われていない。句動詞の通時的研究は比較言語学、英語学、コーパス言語学のみならず辞書編纂、句動詞指導など英語教育にも多大な影響を与える分野である。

従来の句動詞研究では句動詞を次の4種類に分類している。

- (1)他動詞+副詞(不変化詞) (2)自動詞+副詞
(3)動詞+前置詞 (4)動詞+副詞+前置詞

さらに意味的特性、個々の単語から全体の意味を類推できるかの観点から、「語義通りの結合」、「半イディオム」、「イディオム」の3つの下位区分を設定している。

句動詞を通時的に分析した代表的な先行研究には Hiltunen(1983) *The Decline of the Prefixes and the Beginnings of the English Phrasal Verb* と Niwa, Y(1983) "The Second Prefixing of Adverbial Particles in OE and ON," *Studies in English and other Germanic Languages* があるが、それ以降主だった通時的研究はほとんど国内ではなされていない。

句動詞を通時的に抽出するために OED-CDROM 以外に、画期的な統語標識(syntactic annotation)が付与された3つの史的コーパス、YCOE(古英語)、PPCME 2(中英語)、PPCEME(初期近代英語)を利用する。YCOE(古英語)、PPCME 2(中英語)、PPCEME(初期近代英語)には統語標識が付与されているため、統語標識を指定すれば比較的容易に句動詞を検索することができる。但し統語標識は生成文法理論(generative grammar)に基づいているため、残念ながら YCOE 等を有効利用している研究者は少ない。神谷は10年以上 YCOE, PPCME 2等を利用して結果構文・コロケーション等の通時的研究を行ってきた。その実績を基に、句動詞を検索し、句動詞の成立過程のメカニズムを体系的に明らかにすると言う着想に至った。

2. 研究の目的

句動詞の先行研究は共時的なレベルでの研究がほとんどである。本研究では、英語の句動詞を通時的に、中英語、古英語まで遡り、句動詞成立過程のメカニズム解明のための研究を行う。句動詞を通時的に発達過程の側面から分類し体系化していく研究スタンスは国内ではあまり例がなく大きな特色の一つと言える。

現代英語コーパスを利用した句動詞の研究は数多く存在するが、史的コーパスを用いて、句動詞を分析した研究は少ない。まして文法標識(統語標識)の付いた史的コーパスを用いて句動詞を分析した研究は皆無に等しい。コーパス検索には OED-CDROM 以外に画期的な統語標識(syntactic annotation)が付加された3つの史的コーパス、YCOE(古英語)、PPCME 2(中英語)、PPCEME(初期近代英語)を利用する。この3つのコーパスにおける統語標識付けは、同じコーパスデザインで、生成文法理論に基づき句、節にもタグが付与されている。Hiltunen(1983)等の先行研究はコンピュータ可読の大型コーパスが存在しない時代の研究であり、経験主義的に句動詞の用例を導き出している。史的コーパスを利用することにより、Hiltunen(1983)等の先行研究を再検討し記述に修正を施すことができる。句動詞の用例を年代ごとに計量的に導き出す。

本研究では、[1] OED-CDROM 及び古英語から初期近代英語まで同じコーパスデザインで統語標識が付与された一貫性のある史的コーパスを用いて研究を行う。[2] 句動詞の成立過程を「古英語接頭辞付動詞からの発達」に焦点を合わせて、句動詞を分類する。

3. 研究の方法

(1) 句動詞(phrasal verb)とは、動詞+副詞、動詞(+副詞)+前置詞の結び付きで多用な意味を表す口語的表現であり、現代英語の特徴の1つである。句動詞の発達過程には二つの過程が考えられる。[1]古英語の接頭辞付動詞(prefixed verb)からの発達、即ち1066年のノルマン人の征服以降、フランス語との言語衝突により動詞の前に位置していた副詞または分離接頭辞が動詞の後に移動し句動詞の原型が出来上がったこと(例: upgan→go up)。[2]フランス語源の多音節の一語動詞を翻訳する過程、即ち本来語である英語の基本動詞と副詞で置き換える過程を経て句動詞が量産化されたこと(例: ex-(強意(完全に)) tinguish(消火する)→put out(完全に)(火を消す))。

[1]の古英語の接頭辞付動詞から発達した句動詞の起源に焦点を合わせる。通時的コーパスである YCOE を利用して接頭辞付動詞、特に up+動詞、out+動詞を全て抽出する。そして句動詞の起源である古英語に現れる接頭辞付動詞の基礎資料を作成する。

(2) 古英語の接頭辞付動詞が現代英語までどの程度存続しているのか、古英語接頭辞付動詞と現代英語に残る接頭辞付動詞の対応関係、さらに句動詞との対応関係を OED の記述を踏まえながら、表に示す。また、古英語接頭辞付動詞から句動詞(特に動詞+副詞辞)への移行過程において、どのように語義通りの意味(語源の意味)から比喩的意味に移行していったのか、具体例を小学館 British

National Corpus (以下 BNC)や『研究社・ロングマン句動詞英和辞典』を用いて示す。

(3) 中英語 (ME) に接頭辞付動詞 (up- + 動詞, out- + 動詞) がどの程度継続しているのか、さらに中英語で確立した接頭辞付動詞 (up- + 動詞, out- + 動詞) を PPCME 2 を利用して抽出する。最後に、古英語接頭辞付動詞と中英語に引き継がれた接頭辞付動詞、さらに中英語で確立した接頭辞付動詞を表にまとめる。

4. 研究成果

(1) 通時的コーパス YCOE を利用して、古英語 YCOE に現れる接頭辞付 (up-, out-) 動詞を全て抽出した。

up- は 20 の動詞と out- は 36 の動詞と結合することが判明した。接頭辞付 (up-, out-) 動詞を全て抽出し、句動詞の起源 (古英語接頭辞付動詞)・発達に関する研究の基礎資料 (DATABASE) を作成した。

up-

- (1) upadon (do up) [1] updon [1]
- (2) upagon (go up) [2] upgan [8]
- (3) upahebban (heave up) [121] uppahebban [6] uphebban [2] upphebban [1] uponhebban [1]
- (4) upahon (hang up) [1] upahangian [1]
- (5) uparæran (rear up) [5]
- (6) uparisan (rise up) [1]
- (7) upaspringan (spring up) [1] upspringan
- (8) upaspryttan (sprout out) [1]
- (9) upastandan (stand up) [1] upstandan [1]
- (10) upastigan (rise) [4] upstigan [6] uppstigan [2]
- (11) upastreccan (stretch up) [1]
- (12) upaweallan (boil) [1]
- (13) upcuman (come up) [4] uppcuman [1]
- (14) upgetiegan (tie up) [1]
- (15) upræcan (reach up) [1]
- (16) upsceawian (show up) [1]
- (17) upteon (draw up) [1]
- (18) upwegan (weigh up) [2]
- (19) upweorpan (throw) [1]
- (20) upyrnan (run up) [4] uppyrnan [1]

out-

- (1) utadon (do out) [3]
- (2) utadrifan (drive out) [29] utdrifan [6]
- (3) utahræcan (spit) [1]
- (4) utalædan (lead out) [1] utlædan [5] utgelædan [2]
- (5) utamæran (drive out) [2]
- (6) utasceotan (shoot out) [1] utsceotan [2]
- (7) utascufan (shove out) [1]
- (8) utaslean (break out) [1] utslean [4]
- (9) utawegan (weigh out) [1]
- (10) utaweorpan (throw out) [6] utweorpan [1]
- (11) utæþmian (breathe out) [1]

- (12) utberstan (burst out) [2]
- (13) utblawan (blow out) [1]
- (14) utbrecan (break out) [1]
- (15) utbringan (bring out) [2]
- (16) utcuman (come out) [2]
- (17) utdragan (draw out) [2]
- (18) utfaran (travel) [13]
- (19) utferan (go out) [5]
- (20) utfleogan (fly out) [1]
- (21) utflowan (flow out) [3]
- (22) utforlætan (cast out) [4]
- (23) utgan (go out) [63] utgangan [26] utgongan [1]
- (24) utgewendan (turn) [1]
- (25) utfehtan (take by assault) [1]
- (26) utheapan (leap out) [1]
- (27) utlagian (outlaw) [8]
- (28) utlætan (let out) [2]
- (29) utræsan (rush out) [2]
- (30) utræcan (reach out) [1]
- (31) utscufan (push out) [1]
- (32) utsendan (send out) [1]
- (33) utions (issue out) [2]
- (34) utteon (draw out) [3]
- (35) uttogeotan (spill) [1]
- (36) utyrnan (run out) [13]

(2) 古英語の接頭辞付動詞が現代英語までどの程度存続しているのか、古英語接頭辞付動詞と現代英語に残る接頭辞付動詞の対応関係、さらに句動詞との対応関係を表に示した。例：

古英語	現代英語	句動詞
uphebban	upheave	heave up
utdrifan	outdrive	drive out

詳細なデータは神谷 (2016) を参照。

古英語接頭辞付動詞の多くは、現代英語において接頭辞付動詞は廃語または“まれ”にしか使用されなくなっている。古英語接頭辞付動詞の接頭辞 up-, out- は語義通りの意味 (上下の運動) であるが、句動詞になると古英語の接頭辞に対応する副詞辞は語義通りの意味 (上下の運動) だけではなく、比喩的意味になり半イディオム構文を形成する。さらに個々の単語 (動詞・副詞辞) の意味から全体の意味を類推することが困難な句動詞 (高度なイディオム) に発達していることが各々の例から判断できた。

(3) PPCME2 を検索した結果、古英語から中英語に継続している接頭辞付動詞は以下のとおりである。

up- + 動詞 2 つの動詞

upcuman > upcumen

upstandan > upstanden

ME まで存続した upcumen, upstanden は接頭辞付動詞としては現代英語まで存続しなかった。

out- +動詞 2つの動詞

utweorpan > utweorpen

utlagian > utlazien

ME まで存続した utweorpan は現代英語まで存続しなかったが、utlazien は現代英語(outlaw)まで存続している。

中英語期に生まれた接頭辞付動詞：uphalden, uppen, upwenden, uphezen, upliften uphalden, uppen, upwenden, uphezen, upliften は中英語期に生まれた接頭辞付動詞であり、uphalden, upliften 以外は現代英語まで存続しなかったか、または現代英語の早期の段階で廃語になった。uphalden, upliften は現代英語では句動詞としても多用される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

神谷昌明 (2018) 「句動詞指導に必要な基礎知識 句動詞(主に動詞+副詞)の起源・発達に焦点を合わせて」全国高等専門学校英語教育学会『研究論集』第37号 pp.1-10. (査読有り)

神谷昌明 (2017) 「句動詞の起源・発達 - 中英語に現れる接頭辞 (up-, out-) 付動詞 - 」『豊田工業高等専門学校研究紀要』 Vol. 50. pp.66-80. (査読無し)

DOI

<https://doi.org/10.20692/toyotakosenkiyo.50-11>

神谷昌明・高橋薫 (2016) 「句動詞の起源・発達 - 現代英語に現れる接頭辞 (up-, out-) 付動詞と句動詞 - 」『豊田工業高等専門学校研究紀要』 Vol. 49. pp.108-129. (査読無し)

DOI

<http://doi.org/10.20692/toyotakosenkiyo.12>

KAMIYA, Masaaki (2015) "The Origin and Development of Phrasal Verbs—The Database of Prefixed Verbs with up- and out- in Old English—," Journal of National Institute of Technology, Toyota College Vol. 48. pp.63-90. (査読無し)

DOI

<https://doi.org/10.20692/toyotakosenkiyo.KJ00010158369>

[学会発表](計2件)

神谷昌明 (2017) 「句動詞指導に必要な基礎知識---句動詞(主に動詞+副詞)の起源・発達に焦点を合わせて---」全国高専英語教育学会第41回研究大会(京都府中小企業会館) 2017年9月2日

神谷昌明 (2017) コーパスの言語学諸分野における活用(2) 歴史言語学「句動詞の起源・発達---古英語に現れる接頭辞付動詞の抽出; YCOE を利用して---

講師: 神谷昌明 英語コーパス学会 東支部研究会(東京成徳大学) 2017年3月11日

[図書](計0件)

[その他]

ホームページ等

Kamiya's Home Page

<http://www.dge.toyota-ct.ac.jp/~kamiya/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神谷 昌明 (KAMIYA Masaaki)

豊田工業高等専門学校・一般学科・教授

研究者番号: 40194980

(2) 連携研究者

高橋 薫 (TAKAHASHI Kaoru)

東京理科大学・工学部教養・教授

研究者番号: 90216705

研究成果の詳細(用例, 図表など)は次の報告書(ハードコピー)を参照。

神谷昌明「句動詞の起源・成立過程に関する通時的研究」日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C) 平成27年度~平成29年度『研究成果報告書』(研究代表者: 神谷昌明)(74頁)2018

報告書(ハードコピー)の問い合わせ先:

神谷昌明

kamiya@toyota-ct.ac.jp